

21世紀のバッハ「ヨハネ受難曲」に寄せて

人間を描く！

三澤 洋史

東京バロック・スコラーズ音楽監督



新国立劇場合唱団首席指揮者としての活動を中心にオペラの世界に身を置き、ワグネルリアンとして楽劇「ニーベルングの指環」全四部作を指揮する私は、ミュージカルを台本から書き、作曲、演出をする。私にとっては、音楽にドラマを感じ表現することが天職のような気がする。

それ故に私の演奏する受難曲はオペラ的になるのかと勘違いする人はいるかもしれない。だがそれは全く違う。私は、全ての“いわゆるオペラ的”なるものを嫌悪する。何をやっても、私が目指すものはドラマそのものなのだ。ドラマとは、「人間とは何か?」という問いであり、「生きるとは何か?」ということへの模索である。私がドラマに向かうのは、宗教に傾倒するのと同じモチベーションによる。

ソリスト達の顔ぶれを見ていただきたい。しかし私は彼らとオペラをやるのではない。私が選び抜いた彼らは「人間を描く達人たち」なのだ。

まるで台風目のような静けさに支配されているイエスの回りに、怒濤のような混乱や怒り、欺瞞、陰謀、裏切り、悔恨などの感情が荒れ狂う。どうしてこのようなことが起こったのか? 何故、救世主は殺されなければならなかったか?

福音史家が、簡単な伴奏に乗って、歌とも朗読ともつかないやり方で淡々と物語りを進めて行く。しかし、この方法は、どんな大管弦楽も及ばないドラマチックな効果を紡ぎ出す。書くことが仕事である作曲家の“究極的な挑戦”とは、最低限の音符を書き、あとは表現者の感性を信じること。

加えて、群衆合唱の迫力に満ちた表現力。心に染みる珠玉のアリア。どれをとっても、バッハのドラマティカーとしての圧倒的な能力に舌を巻くばかりだ。しかも、それらすべての表現に、神を信じ、人間を信じていた彼の愛があまねく行き渡っている。

進化した東京バロック・スコラーズは、ここに満を持して、世界に「ヨハネ受難曲」を発信する!



福音史家
畑 儀文



イエス
小森 輝彦



ソプラノ
國光 ともこ



アルト
清水 華澄



テノール
鈴木 准



バス
萩原 潤



コンサートマスター
近藤 薫

東京バロック・スコラーズ

三澤洋史のもとで「21世紀のバッハ」を追求しようという志を共有する合唱団と管弦楽団。合唱団はオーディションによって選ばれたアマチュア、アンサンブルは一流のプロ奏者からなる。

演奏のみならず、公開レッスンや講演会などの多角的な活動を行っている。また、バッハを愛好する個人や団体とのネットワークを広げ、バッハ探求のセンターとなることを目指している。

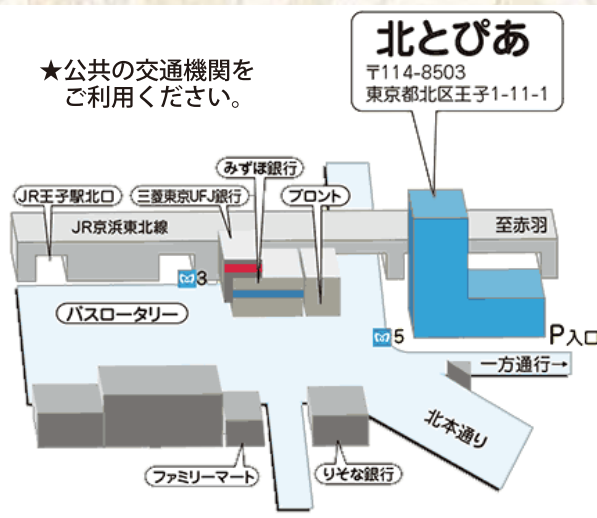
団員募集



東京バロック・スコラーズは、一緒にバッハを楽しみ、ステージを作り上げていく仲間を募集しています。入団に際してはオーディションを受けていただきますが、日程等はホームページでご案内しています。

皆様の参加をお待ちしています。

★公共の交通機関をご利用ください。



東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」より徒歩15分
都営大江戸線「本郷三丁目」より徒歩15分
東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」より徒歩15分